ティーチング・ポートフォリオ（教育業績ファイル）

教員氏名	石田　麻子

主な担当科目	芸術文化と社会Ⅱ, 芸術運営論Ⅱ,文化政策論Ⅱ,パフォーマンス①②④,音楽と社会特論,芸術運営演習,文化政策研究Ⅱ,音楽マネジメント特殊講義Ⅴ,音楽マネジメント特殊講義Ⅵ,音楽芸術運営特別演習①,音楽芸術運営特別演習②博士研究指導,博士特別運営研究②,博士論文演習②
シラバス	次ページをご参照ください

2022年の 教育目標・授業に 臨む姿勢	現代社会と芸術文化に直接関わるニーズを適切に授業内容、運用に反映、多様な背景を持つ大学院生、留学生への対応も含めていく。さらに科学研究費助成事業による研究推進、研究所の運営業務を通じて培った人脈や最新の知見など獲得した成果を学生教育に取り入れる。マネジメント実践は表現系の学生たちにも必須であり、担当科目において、他コースの学生たちにアートマネジメントの本質を教育する場としていく。
2022年の教育に関する自己評価	社会人学生、留学生など、コースでも最も多様な学生を受け入れている「音楽芸術特別演習①、②」を含め、幅広いバックグラウンドを持つ学生たちの意欲を引き出す授業運営とした。北京大学での講義の成果を、大学院や学部の授業内あるいは来日の叶わない学生へのオンライン講座で共有するなど、留学生を中心に学習意欲の向上につなげ、また表現系の学生たちが多数履修する専門授業も実施、幅広い教育実践を実現した。また特に、所属ゼミの博士学生や修士学生が大学紀要、研究所紀要、外部学会での査読論文採用を果たすなどの成果をあげた。

2022年のFD活動に関する自己評価	学生への対応は年々多様性を増しているため、国内外機関との連携・研修、とりわけアジアを中心に海外における舞台芸術の最先端での動きへの知見の獲得、深化に努めて、講義内容およびゼミ指導に資するものとした。特に、中国、韓国における舞台芸術の展開を実際の授業内容に取り入れたほか、バーチャルと実演との直接間接の関係性の変化を認識しながら、学内での授業実施、公開講座などの企画にも活かした。世界の芸術創造活動の軸とその展開、そして考え方が大きく変動していることを学生と共有していった。
授業改善のために 取り入れた研修内容	大学主催のアートマネジメント講座を企画、外部受講生とのインタラクティブな講義実施により、社会の動向やニーズをとらえた成果を授業に取り入れるようにした。国内外の学協会からの招聘に応じた講演を実施、さらに参加することにより、国内や世界の劇場運営、団体運営などの日頃の情報収集が授業改善に直接資するものとした。外部組織との関係性から生み出されたアートマネジメントの最前線にかかる情勢把握を活用した授業内容は学生への興味と関心を引き出すことに役立っていると考える。

科目名－クラス名

芸術文化と社会Ⅱ

曜日時限

火 3時限

担当教員

石田　麻子

授業形態	開講年次	開講期	単位数
講義	2～	後期	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	70	0	0	30	100

教育到達目標と概要

現在の国内外における芸術文化のマネジメントや関連した分野の幅広い専門知識を獲得することを目標とし、大学での学修が将来の自らの実践にどのように活かせるのかを展望する。多様な分野から芸術文化環境にかかる最新のトピックなどをお話いただくために、音楽をはじめとする芸術文化の各分野の第一線で活躍中の方々を中心に外部講師としてお招きし、特別講座を実施する。専門知識、多文化・異文化に関する知識と理解、文化・社会と自然に関する知識と理解、情報活用能力などが獲得できる。講座では、講師への積極的な質問や意見の提示による討議参加が望ましい。毎回、授業内容に関る課題認識と理解とを目的としたフィードバック・レポートの作成を義務づける。また、講義の性質上、講座への参加状況も重視する。遠隔地に居住するなど講師の状況によってはオンラインを活用した講義とする場合もあるが学生は教室で受講する。（2021年度の外部講師と講義例［一部］安達真理先生「現役フリーランスアーティストに学ぶセルフマネージメント術」鬼久保美帆先生「題名のない音楽会の作り方」植村啓一先生「広告・宣伝のディレクション」小川光生先生「インタビューをしよう。～質問の技術を知り、取材のおもしろさを知る～」など）

学修成果

芸術文化に関わる仕事を中心に、社会において一線で活躍されている外部講師の方々による本講座を受講することによって、履修者は、自身の卒業後の進路を具体的に考え、それに向けて必要となる今後の学修目標をたてることができるようになる。専門知識の獲得を中心に、多様な芸術文化関連の知識と理解、文化・社会と自然に関する知識と理解、情報活用能力などを獲得できるようになる。

授業展開と内容

第1回	ガイダンス。特別講師のバックグラウンドと設定された講義のテーマを理解する（石田・仁科）
第2回	音楽芸術環境にかかる最新のトピックを取り上げた講義①劇場の運営（外部講師、石田）
第3回	音楽芸術環境にかかる最新のトピックを取り上げた講義②実演芸術団体の運営（外部講師、石田）
第4回	音楽芸術環境にかかる最新のトピックを取り上げた講義③映画のマネジメント（外部講師、石田）
第5回	音楽芸術環境にかかる最新のトピックを取り上げた講義④映画とフェスティバル（外部講師、石田）
第6回	音楽芸術環境にかかる最新のトピックを取り上げた講義⑤芸術文化を広報・宣伝する（外部講師、石田）
第7回	音楽芸術環境にかかる最新のトピックを取り上げた講義⑥芸術文化と社会のかかわり（外部講師、石田）
第8回	音楽芸術環境にかかる最新のトピックを取り上げた講義⑦芸術文化と国際戦略（外部講師、石田）
第9回	音楽芸術環境にかかる最新のトピックを取り上げた講義⑧芸術文化と経営（外部講師、石田）
第10回	音楽芸術環境にかかる最新のトピックを取り上げた講義⑨芸術フェスティバル（外部講師、石田）
第11回	音楽芸術環境にかかる最新のトピックを取り上げた講義⑩地域文化政策の現場から（外部講師、石田）
第12回	音楽芸術環境にかかる最新のトピックを取り上げた講義⑪芸術文化関連組織の仕事（仁科）
第13回	音楽芸術環境にかかる最新のトピックを取り上げた講義⑫芸術家のプロモーション（外部講師、石田）
第14回	音楽芸術環境にかかる最新のトピックを取り上げた講義⑬文化政策の現場から（外部講師、石田）
第15回	担当教員による講義のまとめ。本講義で獲得した知見を振り返るための授業内小テストの実施。（石田・仁科）
第16回	
第17回	
第18回	
第19回	
第20回	
第21回	
第22回	
第23回	
第24回	
第25回	
第26回	
第27回	
第28回	

第29回

第30回

履修上の注意

遅刻は厳禁。講義のテーマについて、事前学修をしておくこと。積極的な質疑応答への参加が望ましい。講師との日程調整の結果、シラバス記載の内容が前後して取り上げられる可能性がある。初回授業のガイダンスで、各回の講師と講義内容をアナウンスする。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

講師の携わる芸術文化に関わる仕事の内容について、参考書等を参照しながら、あらかじめ知識を得ておくこと。予習と復習にそれぞれ60分程度、講師や講師の仕事に関する資料調査、文献調査などをおこなうこと。毎回、フィードバック・レポートの執筆・提出を課し、担当教員は採点、学生の学修状況を把握する。最終週の前にレポートは学生に返却する。

教科書・参考書

日本クラシック音楽事業協会の「クラシック・コンサート制作の基礎知識」（ヤマハ・ミュージック・メディア発行）、ベルンハルト・ケレス他著「クラシック音楽家のためのセルフマネジメント・ハンドブック」（アルテスパブリッシング発行）を参考書とする。

科目名－クラス名

芸術文化と社会Ⅱ

曜日時限

火 3時限

担当教員

石田　麻子

授業形態	開講年次	開講期	単位数
講義	2～	後期	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	70	0	0	30	100

教育到達目標と概要

現在の国内外における芸術文化のマネジメントや関連した分野の幅広い専門知識を獲得することを目標とし、大学での学修が将来の自らの実践にどのように活かせるのかを展望する。多様な分野から芸術文化環境にかかる最新のトピックなどをお話いただくために、音楽をはじめとする芸術文化の各分野の第一線で活躍中の方々を中心に外部講師としてお招きし、特別講座を実施する。専門知識、多文化・異文化に関する知識と理解、文化・社会と自然に関する知識と理解、情報活用能力などが獲得できる。講座では、講師への積極的な質問や意見の提示による討議参

学修成果

芸術文化に関わる仕事を中心に、社会において一線で活躍されている外部講師の方々による本講座を受講することによって、履修者は、自身の卒業後の進路を具体的に考え、それに向けて必要となる今後の学修目標をたてることができるようになる。専門知識の獲得を中心に、多様な芸術文化関連の知識と理解、文化・社会と自然に関する知識と理解、情報活用能力などを獲得できるようになる。

授業展開と内容

第1回	ガイダンス。特別講師のバックグラウンドと設定された講義のテーマを理解する（石田・仁科）
第2回	音楽芸術環境にかかる最新のトピックを取り上げた講義①劇場の運営（外部講師、石田）
第3回	音楽芸術環境にかかる最新のトピックを取り上げた講義②実演芸術団体の運営（外部講師、石田）
第4回	音楽芸術環境にかかる最新のトピックを取り上げた講義③映画のマネジメント（外部講師、石田）
第5回	音楽芸術環境にかかる最新のトピックを取り上げた講義④映画とフェスティバル（外部講師、石田）
第6回	音楽芸術環境にかかる最新のトピックを取り上げた講義⑤芸術文化を広報・宣伝する（外部講師、石田）
第7回	音楽芸術環境にかかる最新のトピックを取り上げた講義⑥芸術文化と社会のかかわり（外部講師、石田）
第8回	音楽芸術環境にかかる最新のトピックを取り上げた講義⑦芸術文化と国際戦略（外部講師、石田）
第9回	音楽芸術環境にかかる最新のトピックを取り上げた講義⑧芸術文化と経営（外部講師、石田）
第10回	音楽芸術環境にかかる最新のトピックを取り上げた講義⑨芸術フェスティバル（外部講師、石田）
第11回	音楽芸術環境にかかる最新のトピックを取り上げた講義⑩地域文化政策の現場から（外部講師、石田）
第12回	音楽芸術環境にかかる最新のトピックを取り上げた講義⑪芸術文化関連組織の仕事（仁科）
第13回	音楽芸術環境にかかる最新のトピックを取り上げた講義⑫芸術家のプロモーション（外部講師、石田）
第14回	音楽芸術環境にかかる最新のトピックを取り上げた講義⑬文化政策の現場から（外部講師、石田）
第15回	担当教員による講義のまとめ。本講義で獲得した知見を振り返るための授業内小テストの実施。（石田・仁科）
第16回	
第17回	
第18回	
第19回	
第20回	
第21回	
第22回	
第23回	
第24回	
第25回	
第26回	
第27回	
第28回	
第29回	
第30回	

履修上の注意

遅刻は厳禁。講義のテーマについて、事前学修をしておくこと。積極的な質疑応答への参加が望ましい。講師との日程調整の結果、シラバス記載の内容が前後して取

り上げられる可能性がある。初回授業のガイダンスで、各回の講師と講義内容をアナウンスする。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

講師の携わる芸術文化に関わる仕事の内容について、参考書等を参照しながら、あらかじめ知識を得ておくこと。予習と復習にそれぞれ60分程度、講師や講師の仕事に関する資料調査、文献調査などをおこなうこと。毎回、フィードバック・レポートの執筆・提出を課し、担当教員は採点、学生の学修状況を把握する。最終週の前にレポートは学生に返却する。

教科書・参考書

日本クラシック音楽事業協会の「クラシック・コンサート制作の基礎知識」（ヤマハ・ミュージック・メディア発行）、ベルンハルト・ケレス他著「クラシック音楽家のためのセルフマネジメント・ハンドブック」（アルテスパブリッシング発行）を参考書とする。

科目名－クラス名

芸術運営論 II

曜日時限

火 3時限

担当教員

石田　麻子

授業形態	開講年次	開講期	単位数
講義	3〜	後期	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	70	0	0	30	100

教育到達目標と概要

現在の国内外における芸術文化のマネジメントや関連した分野の幅広い専門知識を獲得することを目標とし、大学での学修が将来の自らの実践にどのように活かせるのかを具体的に考えられるようになることが教育到達目標である。多様な分野から芸術文化環境にかかる最新のトピックなどをお話いただくために、音楽をはじめとする芸術文化の各分野の第一線で活躍中の方々を中心に外部講師としてお招きし、特別講座を実施する。専門知識、多文化・異文化に関する知識と理解、文化・社会と自然に関する知識と理解、情報活用能力などが獲得できる。講座では、講師への積極的な質問や意見の提示による討議参加が望ましい。毎回、授業内容に関る課題認識と理解とを目的としたフィードバック・レポートの作成を義務づける。また、講義の性質上、講座への参加状況も重視する。遠隔地に居住するなど講師の状況によってはオンラインを活用した講義とする場合もあるが学生は教室で受講する。（2021年度の外部講師と講義例［一部］安達真理先生「現役フリーランスアーティストに学ぶセルフマネージメント術」鬼久保美帆先生「題名のない音楽会の作り方」植村啓一先生「広告・宣伝のディレクション」小川光生先生「インタビューをしよう。〜質問の技術を知り、取材のおもしろさを知る〜」など）

学修成果

芸術文化に関わる仕事を中心に、社会において一線で活躍されている講師の方々による本講座を受講することによって、履修者は、自身の卒業後の進路を具体的に考えられるようになる。さらにそのために必要な今後の学修計画がたてられるようになる。

授業展開と内容

第1回	ガイダンス。特別講師のバックグラウンドと設定された講義のテーマを理解する（石田・仁科）
第2回	音楽芸術環境にかかる最新のトピックを取り上げた講義①劇場の運営（外部講師、石田）
第3回	音楽芸術環境にかかる最新のトピックを取り上げた講義②実演芸術団体の運営（外部講師、石田）
第4回	音楽芸術環境にかかる最新のトピックを取り上げた講義③映画のマネジメント（外部講師、石田）
第5回	音楽芸術環境にかかる最新のトピックを取り上げた講義④映画とフェスティバル（外部講師、石田）
第6回	音楽芸術環境にかかる最新のトピックを取り上げた講義⑤芸術文化を広報・宣伝する（外部講師、石田）
第7回	音楽芸術環境にかかる最新のトピックを取り上げた講義⑥芸術文化と社会のかかわり（外部講師、石田）
第8回	音楽芸術環境にかかる最新のトピックを取り上げた講義⑦芸術文化と国際戦略（外部講師、石田）
第9回	音楽芸術環境にかかる最新のトピックを取り上げた講義⑧芸術文化と経営（外部講師、石田）
第10回	音楽芸術環境にかかる最新のトピックを取り上げた講義⑨芸術フェスティバル（外部講師、石田）
第11回	音楽芸術環境にかかる最新のトピックを取り上げた講義⑩地域文化政策の現場から（外部講師、石田）
第12回	音楽芸術環境にかかる最新のトピックを取り上げた講義⑪芸術文化関連組織の仕事（仁科）
第13回	音楽芸術環境にかかる最新のトピックを取り上げた講義⑫芸術家のプロモーション（外部講師、石田）
第14回	音楽芸術環境にかかる最新のトピックを取り上げた講義⑬文化政策の現場から（外部講師、石田）
第15回	担当教員による講義のまとめ。本講義で獲得した知見を振り返る授業内小テストの実施。（石田・仁科）
第16回	
第17回	
第18回	
第19回	
第20回	
第21回	
第22回	
第23回	
第24回	
第25回	
第26回	
第27回	
第28回	
第29回	
第30回	

履修上の注意

遅刻は厳禁。講義のテーマについて、事前学修をしておくこと。積極的な質疑応答への参加が望ましい。講師との日程調整の結果、シラバス記載の内容が前後して取り上げられる可能性がある。初回授業のガイダンスで、各回の講師と講義内容をアナウンスする。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

講師の携わる芸術文化に関わる仕事の内容について、参考書等を参照しながら、あらかじめ知識を得ておくこと。予習と復習にそれぞれ60分程度、講師や講師の仕事に関する資料調査、文献調査などをおこなうこと。毎回、フィードバック・レポートの執筆・提出を課し、担当教員は採点、学生の学修状況を把握する。最終週の前にレポートは学生に返却する。

教科書・参考書

日本クラシック音楽事業協会の「クラシック・コンサート制作の基礎知識」（ヤマハ・ミュージック・メディア発行）、ベルンハルト・ケレス他著「クラシック音楽家のためのセルフマネジメント・ハンドブック」（アルテスパブリッシング発行）を参考書とする。

科目名－クラス名

文化政策論 II

曜日時限

水 2時限

担当教員

石田　麻子

授業形態	開講年次	開講期	単位数
講義	3～	後期	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	30	70	0	0	0	100

教育到達目標と概要

舞台芸術をとりまく政策に関する適切な基礎知識を獲得し、問題意識を持つことは、様々な芸術文化に関わる仕事に携わる上で極めて重要である。この授業では、海外の歌劇場や音楽祭の運営等に関する学びを通じて、具体的に諸外国の文化政策に係る基礎的かつ専門知識を修得することを目標とする。講義を踏まえ、学生個人が自らの周辺で行われている芸術文化政策の実例を取り上げて、実際にその現状と課題をまとめる。最後に、それらに関するテストを実施する。

学修成果

多様な芸術要素を包含する舞台芸術に関わる文化政策は、日本国内はもとより、各国においても、社会情勢、経済状況などとも密接な関係がある。海外の歌劇場や音楽祭の運営の学修等を通じて、多文化・異文化に関する知識と理解、文化・社会と自然に関する知識と理解を深めることができる。さらに、多様な事象をバランス感覚を持って分析的にとらえ、具体的に各国の文化政策に関する専門知識を得ることを通じて、確実にそれらを論じる論理的思考力、課題解決力を獲得できるようになる。

授業展開と内容

第1回	授業ガイダンス、日本の舞台芸術政策を講義（概論）をつうじて把握する。
第2回	日本の舞台芸術政策の最新情報を、講義とディスカッションにより把握する。
第3回	海外の各国の舞台芸術政策と歌劇場運営、音楽祭運営の関係について、講義（概論）をつうじて把握する。
第4回	海外の舞台芸術政策　イギリスのアーツカウンシル制度の歴史と現状について講義をつうじて把握する。
第5回	海外の舞台芸術政策と歌劇場の運営　イギリス：ロイヤル・オペラ・ハウスの運営の特徴を、講義をつうじて把握する。
第6回	海外の舞台芸術政策と音楽祭の運営　イギリス：グラインドボーン音楽祭の運営の特徴を、講義をつうじて把握。イギリスの文化政策のまとめと授業内小テストの実施。
第7回	海外の舞台芸術政策と歌劇場の運営　ドイツ：バイエルン州立歌劇場の運営の特徴を、講義をつうじて把握する。
第8回	海外の舞台芸術政策と歌劇場の運営　ドイツ：ベルリンの3つの歌劇場の運営の特徴を、講義をつうじて把握。
第9回	海外の舞台芸術政策と音楽祭の運営　オーストリア：ザルツブルク音楽祭の運営の特徴を、講義をつうじて把握する。
第10回	海外の舞台芸術政策と音楽祭の運営　オーストリア：ブレゲンツ音楽祭の運営の特徴を、講義をつうじて把握する。
第11回	海外の舞台芸術政策と歌劇場の運営　フランス：パリ・オペラ座とエクサン・プロヴァンス音楽祭の運営の特徴を、講義をつうじて把握する。
第12回	海外の舞台芸術政策と歌劇場の運営　アメリカ：メトロポリタン歌劇場の運営の特徴を、講義をつうじて把握する。
第13回	海外の芸術文化教育のシステムと社会包摂の事例を、講義をつうじて把握する。
第14回	東アジアの舞台芸術政策を、韓国と中国の事例をつうじて把握する。
第15回	海外の舞台芸術政策と舞台芸術振興との関係性をディスカッションにより把握。イギリス、オーストリア、ドイツ、フランス、アメリカ、東アジア（韓国と中国）の文化政策のまとめを行う。
第16回	
第17回	
第18回	
第19回	
第20回	
第21回	
第22回	
第23回	
第24回	
第25回	
第26回	
第27回	
第28回	
第29回	
第30回	

履修上の注意

授業でのディスカッション参加なども重視する。さらに、関連参考書なども積極的に入手し、専門知識を深めることを期待する。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

舞台芸術上演の現状に関して常に意識をし、授業内で指示する課題を実施して授業に臨むこと。世界の政治や経済、社会情勢に関する情報を収集していくこと。予習と複数にそれぞれ60分程度、資料や文献の読み込みと復習を行うこと。

教科書・参考書

石田麻子『芸術文化助成の考え方』（美学出版）2021を参考書とする。購入することが望ましい。
その他には授業内で随時指示および配付する。

科目名－クラス名

パフォーマンス①

曜日時限

他

担当教員

石田　麻子

授業形態	開講年次	開講期	単位数
演習		通年	1

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	0	0	100	0	100

教育到達目標と概要

各コースにおいて実施される授業およびその成果発表となる公演に、コース内でその授業の対象年次以外の学生、あるいは、他の学科・コースに所属する学生が一員として参加し、一連の演習、リハーサル、ゲネプロ、本番を経験することでその全体像を学ぶ。また、ホールや舞台の持つ様々な機構や機能を体感・体験することで、総合芸術への理解を深める。

学修成果

自身のカリキュラム外となる他コースの授業およびその授業成果となる公演に参加することで、幅広い舞台経験を積むことができ、多彩な演奏技術や表現方法を身につけることができる。また、多様な出演者、スタッフと協働して公演を作り上げる体験をすることで、柔軟で的確なコミュニケーション能力を獲得することができ、自身の専門分野にも大きく役立てることができる。

授業展開と内容

第1回	オリエンテーション（授業の進め方、パート分け・配役等）
第2回	作品理解のための演習（楽譜・台本等の読み取り）
第3回	作品理解のための演習（作品の全体像の把握）
第4回	作品理解のための演習（パートの役割の理解）
第5回	作品表現のための演習（作品全体における各パートの位置づけの検討）
第6回	作品表現のための演習（表現アイディアの検討）
第7回	作品表現のための演習（表現アイディアの実現）
第8回	作品表現のための演習（アンサンブルでの表現）
第9回	公演に向けたリハーサル（プログラミング全体の把握）
第10回	公演に向けたリハーサル（スタッフの動きの把握）
第11回	公演に向けたリハーサル（本番の進行の把握）
第12回	会場リハーサル（セッティング・場当たり、粗通し）
第13回	会場リハーサル（返しリハ）
第14回	ゲネプロ
第15回	公演本番
第16回	
第17回	
第18回	
第19回	
第20回	
第21回	
第22回	
第23回	
第24回	
第25回	
第26回	
第27回	
第28回	
第29回	
第30回	

履修上の注意

本科目は担当教員から指名された学生だけが履修できる科目である。履修登録手続きは通常とは異なり、当該授業およびその成果発表となる公演を実施するコースを所管する部会あるいは分科会が教育課程委員会に諮り、承認された後、学生が教務課で手続きをするものとする。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

別途、授業内で指示する。

教科書・参考書

必要に応じて指示する。

科目名－クラス名

パフォーマンス①

曜日時限

他

担当教員

石田　麻子

授業形態	開講年次	開講期	単位数
演習		通年	1

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	0	0	100	0	100

教育到達目標と概要

各コースにおいて実施される授業およびその成果発表となる公演に、コース内でその授業の対象年次以外の学生、あるいは、他の学科・コースに所属する学生が一員として参加し、一連の演習、リハーサル、ゲネプロ、本番を経験することでその全体像を学ぶ。また、ホールや舞台の持つ様々な機構や機能を体感・体験することで、総合芸術への理解を深める。

学修成果

自身のカリキュラム外となる他コースの授業およびその授業成果となる公演に参加することで、幅広い舞台経験を積むことができ、多彩な演奏技術や表現方法を身につけることができる。また、多様な出演者、スタッフと協働して公演を作り上げる体験をすることで、柔軟で的確なコミュニケーション能力を獲得することができ、自身の専門分野にも大きく役立てることができる。

授業展開と内容

第1回	オリエンテーション（授業の進め方、パート分け・配役等）
第2回	作品理解のための演習（楽譜・台本等の読み取り）
第3回	作品理解のための演習（作品の全体像の把握）
第4回	作品理解のための演習（パートの役割の理解）
第5回	作品表現のための演習（作品全体における各パートの位置づけの検討）
第6回	作品表現のための演習（表現アイディアの検討）
第7回	作品表現のための演習（表現アイディアの実現）
第8回	作品表現のための演習（アンサンブルでの表現）
第9回	公演に向けたリハーサル（プログラミング全体の把握）
第10回	公演に向けたリハーサル（スタッフの動きの把握）
第11回	公演に向けたリハーサル（本番の進行の把握）
第12回	会場リハーサル（セッティング・場当たり、粗通し）
第13回	会場リハーサル（返しリハ）
第14回	ゲネプロ
第15回	公演本番
第16回	
第17回	
第18回	
第19回	
第20回	
第21回	
第22回	
第23回	
第24回	
第25回	
第26回	
第27回	
第28回	
第29回	
第30回	

履修上の注意

本科目は担当教員から指名された学生だけが履修できる科目である。履修登録手続きは通常とは異なり、当該授業およびその成果発表となる公演を実施するコースを所管する部会あるいは分科会が教育課程委員会に諮り、承認された後、学生が教務課で手続きをするものとする。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

別途、授業内で指示する。

教科書・参考書

必要に応じて指示する。

科目名－クラス名

パフォーマンス②

曜日時限

他

担当教員

石田　麻子

授業形態	開講年次	開講期	単位数
演習		通年	1

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	0	0	100	0	100

教育到達目標と概要

各コースにおいて実施される授業およびその成果発表となる公演に、コース内でその授業の対象年次以外の学生、あるいは、他の学科・コースに所属する学生が一員として参加し、一連の演習、リハーサル、ゲネプロ、本番を経験することでその全体像を学ぶ。パフォーマンス①での経験を生かしながら、更に積極的に各セクションの役割に注目し、全体の中での自分の役割について考える。

学修成果

自身のカリキュラム外となる他コースの授業およびその授業成果となる公演に参加することで、幅広い舞台経験を積むことができ、多彩な演奏技術や表現方法を身につけることができる。また、多様な出演者、スタッフと協働して公演を作り上げる体験をすることで、柔軟で的確なコミュニケーション能力を獲得することができる。更に、公演ごとに違った指揮者、演出家などの指導を体験し、自らの表現の幅を様々な角度から拡げることができる。

授業展開と内容

第1回	オリエンテーション（授業の進め方、パート分け・配役等）
第2回	作品理解のための演習（楽譜・台本等の正確な読み取り）
第3回	作品理解のための演習（作品の全体像の正確な把握）
第4回	作品理解のための演習（パートの役割のより深い理解）
第5回	作品表現のための演習（作品全体における各パートの位置づけの理解）
第6回	作品表現のための演習（より高度な表現アイディアの検討）
第7回	作品表現のための演習（より高度な表現アイディアの実現）
第8回	作品表現のための演習（アンサンブルでのより高度な表現）
第9回	公演に向けたリハーサル（プログラムの意図の理解）
第10回	公演に向けたリハーサル（スタッフの動きとパフォーマンスの関係の把握）
第11回	公演に向けたリハーサル（本番の進行のなかでの出演者・スタッフの動きの把握）
第12回	会場リハーサル（セッティング・場当たり、粗通し）
第13回	会場リハーサル（返しリハ）
第14回	ゲネプロ
第15回	公演本番
第16回	
第17回	
第18回	
第19回	
第20回	
第21回	
第22回	
第23回	
第24回	
第25回	
第26回	
第27回	
第28回	
第29回	
第30回	

履修上の注意

本科目は担当教員から指名された学生だけが履修できる科目である。履修登録手続きは通常とは異なり、当該授業およびその成果発表となる公演を実施するコースを所管する部会あるいは分科会が教育課程委員会に諮り、承認された後、学生が教務課で手続きをするものとする。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

別途、授業内で指示する。

教科書・参考書

必要に応じて指示する。

科目名－クラス名

パフォーマンス②

曜日時限

他

担当教員

石田　麻子

授業形態	開講年次	開講期	単位数
演習		通年	1

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	0	0	100	0	100

教育到達目標と概要

各コースにおいて実施される授業およびその成果発表となる公演に、コース内でその授業の対象年次以外の学生、あるいは、他の学科・コースに所属する学生が一員として参加し、一連の演習、リハーサル、ゲネプロ、本番を経験することでその全体像を学ぶ。パフォーマンス①での経験を生かしながら、更に積極的に各セクションの役割に注目し、全体の中での自分の役割について考える。

学修成果

自身のカリキュラム外となる他コースの授業およびその授業成果となる公演に参加することで、幅広い舞台経験を積むことができ、多彩な演奏技術や表現方法を身につけることができる。また、多様な出演者、スタッフと協働して公演を作り上げる体験をすることで、柔軟で的確なコミュニケーション能力を獲得することができる。更に、公演ごとに違った指揮者、演出家などの指導を体験し、自らの表現の幅を様々な角度から拡げることができる。

授業展開と内容

第1回	オリエンテーション（授業の進め方、パート分け・配役等）
第2回	作品理解のための演習（楽譜・台本等の正確な読み取り）
第3回	作品理解のための演習（作品の全体像の正確な把握）
第4回	作品理解のための演習（パートの役割のより深い理解）
第5回	作品表現のための演習（作品全体における各パートの位置づけの理解）
第6回	作品表現のための演習（より高度な表現アイディアの検討）
第7回	作品表現のための演習（より高度な表現アイディアの実現）
第8回	作品表現のための演習（アンサンブルでのより高度な表現）
第9回	公演に向けたリハーサル（プログラムの意図の理解）
第10回	公演に向けたリハーサル（スタッフの動きとパフォーマンスの関係の把握）
第11回	公演に向けたリハーサル（本番の進行のなかでの出演者・スタッフの動きの把握）
第12回	会場リハーサル（セッティング・場当たり、粗通し）
第13回	会場リハーサル（返しリハ）
第14回	ゲネプロ
第15回	公演本番
第16回	
第17回	
第18回	
第19回	
第20回	
第21回	
第22回	
第23回	
第24回	
第25回	
第26回	
第27回	
第28回	
第29回	
第30回	

履修上の注意

本科目は担当教員から指名された学生だけが履修できる科目である。履修登録手続きは通常とは異なり、当該授業およびその成果発表となる公演を実施するコースを所管する部会あるいは分科会が教育課程委員会に諮り、承認された後、学生が教務課で手続きをするものとする。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

別途、授業内で指示する。。

教科書・参考書

必要に応じて指示する。

科目名－クラス名

パフォーマンス④

曜日時限

他

担当教員

石田　麻子

授業形態	開講年次	開講期	単位数
演習		通年	1

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	0	0	100	0	100

教育到達目標と概要

各コースにおいて実施される授業およびその成果発表となる公演に、コース内でその授業の対象年次以外の学生、あるいは、他の学科・コースに所属する学生が一員として参加し、一連の演習、リハーサル、ゲネプロ、本番を経験することでその全体像を学ぶ。パフォーマンス①②③で培った力を生かし、積極的なコミュニケーションをとってメンバーを纏めるなど、自ら考え主体的に公演に関わることで、社会生活における自己実現の力を養っていく。

学修成果

自身のカリキュラム外となる他コースの授業およびその授業成果となる公演に参加することで、幅広い舞台経験を積むことができ、多彩な演奏技術や表現方法を身につけることができる。また、多様な出演者、スタッフと協働して公演を作り上げる体験をすることで、柔軟で的確なコミュニケーション能力を獲得することができる。更に、積み上げてきた経験を基に、自分が置かれた状況を俯瞰的に捉え臨機応変な対応ができるようになる。

授業展開と内容

第1回	オリエンテーション（授業の進め方、パート分け・配役等）
第2回	作品理解のための演習（楽譜・台本等のより深い理解と表現方法の検討）
第3回	作品理解のための演習（作品の全体像の把握にもとづくパートの役割のより深い理解）
第4回	作品理解のための演習（パートの役割のより深い理解にもとづく表現方法の検討）
第5回	作品表現のための演習（作品全体における各パートの関係のより深い理解）
第6回	作品表現のための演習（より高度な表現アイディアの検討と実現）
第7回	作品表現のための演習（アンサンブルの全体像を把握した上での表現）
第8回	作品表現のための演習（アンサンブル全体のより高度な表現の検討）
第9回	公演に向けたリハーサル（プログラムの意図を理解したより高度なパフォーマンス）
第10回	公演に向けたリハーサル（スタッフの動きと連携したより高度なパフォーマンス）
第11回	公演に向けたリハーサル（本番の全体像を理解した上でのパフォーマンス）
第12回	会場リハーサル（セッティング・場当たり、粗通し）
第13回	会場リハーサル（返しリハ）
第14回	ゲネプロ
第15回	公演本番
第16回	
第17回	
第18回	
第19回	
第20回	
第21回	
第22回	
第23回	
第24回	
第25回	
第26回	
第27回	
第28回	
第29回	
第30回	

履修上の注意

本科目は担当教員から指名された学生だけが履修できる科目である。履修登録手続きは通常とは異なり、当該授業およびその成果発表となる公演を実施するコースを所管する部会あるいは分科会が教育課程委員会に諮り、承認された後、学生が教務課で手続きをするものとする。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

別途、授業内で指示する。

教科書・参考書

必要に応じて指示する。

科目名－クラス名

音楽と社会特論

曜日時限

火 3時限

担当教員

石田　麻子

授業形態	開講年次	開講期	単位数
講義	3～	通年	4

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	100	0	0	0	100

教育到達目標と概要

音楽を中心とした文化芸術と社会をテーマに幅広い知識を得ることを目標とする。担当教員によるオムニバス方式の講義とする。前期は著作権・法、日本と海外の舞台芸術に関わる様々な現象に関する歴史と現状、演奏家と聴衆、および舞台芸術制作にかかわる人材等の幅広い知識を獲得することを目標にする。後期は、体験から語られる音楽活動、中国の音楽事情、音楽療法に関する知識の修得、など音楽を通じた社会とのかかわりについて幅広く学ぶ。

学修成果

舞台芸術および音楽全般に関する幅広い知識を獲得し、社会におけるさまざまな現象を分析する能力を習得することができる。音楽を通じた社会とのかかわりを多角的に知ることができる。

授業展開と内容

第1回　音楽著作権と著作権法を学ぶ①～知的財産に関する諸法規の概要（第1回～第4回　森川卓夫）

第2回　音楽著作権と著作権法を学ぶ②～芸術に関するビジネスモデルの諸相（森川卓夫）

第3回　音楽著作権と著作権法を学ぶ③～著作者／アーティスト／レコード製作者の権利（森川卓夫）

第4回　音楽著作権と著作権法を学ぶ④～音楽著作権や知的財産の判例（森川卓夫）

第5回　現代舞台芸術の様々なあり方①：オペラ劇場の世界地図（第5回～第9回　石田麻子）

第6回　現代舞台芸術の様々なあり方②：世界のオペラ劇場～読み替え演出とは（石田麻子）

第7回　現代舞台芸術の様々なあり方③：世界のオペラ劇場～オペラ劇場で働く人々（１）アーティスト（石田麻子）

第8回　現代舞台芸術の様々なあり方④：世界のオペラ劇場～オペラ劇場で働く人々（２）制作者・技術者（石田麻子）

第9回　現代舞台芸術の様々なあり方⑤：世界のオペラ・フェスティバル～観光政策とのかかわり（石田麻子）

第10回　戦後日本の劇場・ホールの復興：東京文化会館～新国立劇場（第10回～第15回　岸田生郎）

第11回　戦後日本のオーケストラの変遷（岸田生郎）

第12回　戦後日本のオペラの変遷（岸田生郎）

第13回　サントリーホールについて：クラシック・コンサートの変遷（岸田生郎）

第14回　新国立劇場について（岸田生郎）

第15回　日本のクラシック音楽の現状と課題（岸田生郎）

第16回　私のリコーダー体験：栃木古楽協会、山中湖バロック音楽愛好会等々。「学長カフェ」の源について。（第16回～第20回　簗瀬 進）

第17回　アマチュア合唱団とオペラ体験：栃木県民オペラにおけるオペラの舞台を通した合唱の体験。指導者との出会いと、継続する力について。（簗瀬 進）

第18回　私のバッハ体験：BUS（バッハ宇都宮ソサエティ）における宗教的声楽作品を通した合唱の体験、および日フィル協会合唱団員としての宗教音楽体験。より高い目標をめざして。（簗瀬 進）

第19回　国会コーラス愛好会の活動：党派を超えた仲間たちとの交流。オールスター合唱コンクール（テレビ東京）で優勝、そして「ヒドゥン・アジェンダ（隠された意図）」とは？（簗瀬 進）

第20回　私の尺八体験：東西音楽文化の融合。まとめ。「音楽を愛好する社会人」のひとりとして、そして社会人の生涯学修を支援するひとりとして。（簗瀬 進）

第21回　儒家思想（礼教）及び華夏音楽文化　（第21回～24回　王明君）
第一週 封建社会における礼と楽　1）礼、楽により国家統治及び人間教育　2）自由、競争の社会作り（百家争鳴，百花斉放）

第22回　第二週 東、西音楽文化の流れ
1）皇権制度の下による音楽文化のあり方　2）シルクロード及び東西文化の合流　3）礼教美学と新型音楽文化 （王明君）

第23回　第三週 大唐帝国の詩学と音楽の変遷
1）漢詩芸術の陰に生きる音楽　2）雅と俗を融合した音楽モデル　3）世俗社会と俗楽 （王明君）

第24回　第四週 社会主义制度の下での音乐のあり方
1）音楽とイデオロギー　2）表現の自由と国家モデル　3）対峙する革新的表現と保守的意識 （王明君）

第25回　音楽療法について：概要・隣接する領域との相違（第25回～第30回　二俣泉）

第26回　音楽療法の多様な実践①：身体リハビリテーション、高齢者、精神科、予防（二俣泉）

第27回　音楽療法の多様な実践②：神経発達症の子ども・成人、緩和ケア、その他（二俣泉）

第28回	音楽療法の活動の体験①：歌唱、聴取（二俣泉）
第29回	音楽療法の活動の体験②：楽器演奏、即興（二俣泉）
第30回	音楽療法のまとめ、後期のまとめ（二俣泉）

履修上の注意

舞台芸術全般への興味と関心をもって授業に臨むこと。積極的なディスカッションへの参加を望む。なお、評価については、各担当教員が各最終回授業までに指示する。各担当教員が指示する課題、提出方法、期限は厳守し提出すること。
第16回～第20回は火曜5時限に開講する（その他は火曜3時限）。必要に応じて教室変更もあるため、よく確認すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

指定された教科書に目を通しておくこと（約60分）（前期）。授業の内容に関して、自主的に予習をしておくこと（約60分）（後期）。
各回の授業内容について理解を深めるよう、しっかりと復習をしておくこと（約60分）。

教科書・参考書

教科書：「クラシック・コンサート制作の基礎知識」日本クラシック音楽事業協会発行（前期授業で使用）

科目名－クラス名

音楽と社会特論

曜日時限

火 3時限

担当教員

石田　麻子

授業形態	開講年次	開講期	単位数
講義	3～	通年	0

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	100	0	0	0	100

教育到達目標と概要

音楽を中心とした文化芸術と社会をテーマに幅広い知識を得ることを目標とする。担当教員によるオムニバス方式の講義とする。前期は著作権・法、日本と海外の舞台芸術に関わる様々な現象に関する歴史と現状、演奏家と聴衆、および舞台芸術制作にかかわる人材等の幅広い知識を獲得することを目標にする。後期は、体験から語られる音楽活動、中国の音楽事情、音楽療法に関する知識の修得、など音楽を通じた社会とのかかわりについて幅広く学ぶ。

学修成果

舞台芸術および音楽全般に関する幅広い知識を獲得し、社会におけるさまざまな現象を分析する能力を習得することができる。音楽を通じた社会とのかかわりを多角的に知ることができる。

授業展開と内容

第1回　音楽著作権と著作権法を学ぶ①～知的財産に関する諸法規の概要（第1回～第4回　森川卓夫）

第2回　音楽著作権と著作権法を学ぶ②～芸術に関するビジネスモデルの諸相（森川卓夫）

第3回　音楽著作権と著作権法を学ぶ③～著作者／アーティスト／レコード製作者の権利（森川卓夫）

第4回　音楽著作権と著作権法を学ぶ④～音楽著作権や知的財産の判例（森川卓夫）

第5回　現代舞台芸術の様々なあり方①：オペラ劇場の世界地図（第5回～第9回　石田麻子）

第6回　現代舞台芸術の様々なあり方②：世界のオペラ劇場～読み替え演出とは（石田麻子）

第7回　現代舞台芸術の様々なあり方③：世界のオペラ劇場～オペラ劇場で働く人々（１）アーティスト（石田麻子）

第8回　現代舞台芸術の様々なあり方④：世界のオペラ劇場～オペラ劇場で働く人々（２）制作者・技術者（石田麻子）

第9回　現代舞台芸術の様々なあり方⑤：世界のオペラ・フェスティバル～観光政策とのかかわり（石田麻子）

第10回　戦後日本の劇場・ホールの復興：東京文化会館～新国立劇場（第10回～第15回　岸田生郎）

第11回　戦後日本のオーケストラの変遷（岸田生郎）

第12回　戦後日本のオペラの変遷（岸田生郎）

第13回　サントリーホールについて：クラシック・コンサートの変遷（岸田生郎）

第14回　新国立劇場について（岸田生郎）

第15回　日本のクラシック音楽の現状と課題（岸田生郎）

第16回　私のリコーダー体験：栃木古楽協会、山中湖バロック音楽愛好会等々。「学長カフェ」の源について。（第16回～第20回　簗瀬 進）

第17回　アマチュア合唱団とオペラ体験：栃木県民オペラにおけるオペラの舞台を通した合唱の体験。指導者との出会いと、継続する力について。（簗瀬 進）

第18回　私のバッハ体験：BUS（バッハ宇都宮ソサエティ）における宗教的声楽作品を通した合唱の体験、および日フィル協会合唱団員としての宗教音楽体験。より高い目標をめざして。（簗瀬 進）

第19回　国会コーラス愛好会の活動：党派を超えた仲間たちとの交流。オールスター合唱コンクール（テレビ東京）で優勝、そして「ヒドゥン・アジェンダ（隠された意図）」とは？（簗瀬 進）

第20回　私の尺八体験：東西音楽文化の融合。まとめ。「音楽を愛好する社会人」のひとりとして、そして社会人の生涯学修を支援するひとりとして。（簗瀬 進）

第21回　儒家思想（礼教）及び華夏音楽文化　（第21回～24回　王明君）
第一週 封建社会における礼と楽　1）礼、楽により国家統治及び人間教育　2）自由、競争の社会作り（百家争鳴，百花斉放）

第22回　第二週 東、西音楽文化の流れ
1）皇権制度の下による音楽文化のあり方　2）シルクロード及び東西文化の合流　3）礼教美学と新型音楽文化 （王明君）

第23回　第三週 大唐帝国の詩学と音楽の変遷
1）漢詩芸術の陰に生きる音楽　2）雅と俗を融合した音楽モデル　3）世俗社会と俗楽 （王明君）

第24回　第四週 社会主义制度の下での音乐のあり方
1）音楽とイデオロギー　2）表現の自由と国家モデル　3）対峙する革新的表現と保守的意識 （王明君）

第25回　音楽療法について：概要・隣接する領域との相違（第25回～第30回　二俣泉）

第26回　音楽療法の多様な実践①：身体リハビリテーション、高齢者、精神科、予防（二俣泉）

第27回　音楽療法の多様な実践②：神経発達症の子ども・成人、緩和ケア、その他（二俣泉）

第28回	音楽療法の活動の体験①：歌唱、聴取（二俣泉）
第29回	音楽療法の活動の体験②：楽器演奏、即興（二俣泉）
第30回	音楽療法のまとめ、後期のまとめ（二俣泉）

履修上の注意

舞台芸術全般への興味と関心をもって授業に臨むこと。積極的なディスカッションへの参加を望む。なお、評価については、各担当教員が各最終回授業までに指示する。各担当教員が指示する課題、提出方法、期限は厳守し提出すること。
第16回～第20回は火曜5時限に開講する（その他は火曜3時限）。必要に応じて教室変更もあるため、よく確認すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

指定された教科書に目を通しておくこと（約60分）（前期）。授業の内容に関して、自主的に予習をしておくこと（約60分）（後期）。
各回の授業内容について理解を深めるよう、しっかりと復習をしておくこと（約60分）。

教科書・参考書

教科書：「クラシック・コンサート制作の基礎知識」日本クラシック音楽事業協会発行（前期授業で使用）

科目名－クラス名

音楽と社会特論

曜日時限

火 3時限

担当教員

石田　麻子

授業形態	開講年次	開講期	単位数
講義	2～	通年	4

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	100	0	0	0	100

教育到達目標と概要

音楽を中心とした文化芸術と社会をテーマに幅広い知識を得ることを目標とする。担当教員によるオムニバス方式の講義とする。前期は著作権・法、日本と海外の舞台芸術に関わる様々な現象に関する歴史と現状、演奏家と聴衆、および舞台芸術制作にかかわる人材等の幅広い知識を獲得することを目標にする。後期は、体験から語られる音楽活動、中国の音楽事情、音楽療法に関する知識の修得、など音楽を通じた社会とのかかわりについて幅広く学ぶ。

学修成果

舞台芸術および音楽全般に関する幅広い知識を獲得し、社会におけるさまざまな現象を分析する能力を習得することができる。音楽を通じた社会とのかかわりを多角的に知ることができる。

授業展開と内容

第1回　音楽著作権と著作権法を学ぶ①～知的財産に関する諸法規の概要（第1回～第4回　森川卓夫）

第2回　音楽著作権と著作権法を学ぶ②～芸術に関するビジネスモデルの諸相（森川卓夫）

第3回　音楽著作権と著作権法を学ぶ③～著作者／アーティスト／レコード製作者の権利（森川卓夫）

第4回　音楽著作権と著作権法を学ぶ④～音楽著作権や知的財産の判例（森川卓夫）

第5回　現代舞台芸術の様々なあり方①：オペラ劇場の世界地図（第5回～第9回　石田麻子）

第6回　現代舞台芸術の様々なあり方②：世界のオペラ劇場～読み替え演出とは（石田麻子）

第7回　現代舞台芸術の様々なあり方③：世界のオペラ劇場～オペラ劇場で働く人々（１）アーティスト（石田麻子）

第8回　現代舞台芸術の様々なあり方④：世界のオペラ劇場～オペラ劇場で働く人々（２）制作者・技術者（石田麻子）

第9回　現代舞台芸術の様々なあり方⑤：世界のオペラ・フェスティバル～観光政策とのかかわり（石田麻子）

第10回　戦後日本の劇場・ホールの復興：東京文化会館～新国立劇場（第10回～第15回　岸田生郎）

第11回　戦後日本のオーケストラの変遷（岸田生郎）

第12回　戦後日本のオペラの変遷（岸田生郎）

第13回　サントリーホールについて：クラシック・コンサートの変遷（岸田生郎）

第14回　新国立劇場について（岸田生郎）

第15回　日本のクラシック音楽の現状と課題（岸田生郎）

第16回　私のリコーダー体験：栃木古楽協会、山中湖バロック音楽愛好会等々。「学長カフェ」の源について。（第16回～第20回　簗瀬 進）

第17回　アマチュア合唱団とオペラ体験：栃木県民オペラにおけるオペラの舞台を通した合唱の体験。指導者との出会いと、継続する力について。（簗瀬 進）

第18回　私のバッハ体験：BUS（バッハ宇都宮ソサエティ）における宗教的声楽作品を通した合唱の体験、および日フィル協会合唱団員としての宗教音楽体験。より高い目標をめざして。（簗瀬 進）

第19回　国会コーラス愛好会の活動：党派を超えた仲間たちとの交流。オールスター合唱コンクール（テレビ東京）で優勝、そして「ヒドゥン・アジェンダ（隠された意図）」とは？（簗瀬 進）

第20回　私の尺八体験：東西音楽文化の融合。まとめ。「音楽を愛好する社会人」のひとりとして、そして社会人の生涯学修を支援するひとりとして。（簗瀬 進）

第21回　儒家思想（礼教）及び華夏音楽文化　（第21回～24回　王明君）
第一週 封建社会における礼と楽　1）礼、楽により国家統治及び人間教育　2）自由、競争の社会作り（百家争鳴，百花斉放）

第22回　第二週 東、西音楽文化の流れ
1）皇権制度の下による音楽文化のあり方　2）シルクロード及び東西文化の合流　3）礼教美学と新型音楽文化 （王明君）

第23回　第三週 大唐帝国の詩学と音楽の変遷
1）漢詩芸術の陰に生きる音楽　2）雅と俗を融合した音楽モデル　3）世俗社会と俗楽　（王明君）

第24回　第四週 社会主义制度の下での音乐のあり方
1）音楽とイデオロギー　2）表現の自由と国家モデル　3）対峙する革新的表現と保守的意識 （王明君）

第25回　音楽療法について：概要・隣接する領域との相違（第25回～第30回　二俣泉）

第26回　音楽療法の多様な実践①：身体リハビリテーション、高齢者、精神科、予防（二俣泉）

第27回　音楽療法の多様な実践②：神経発達症の子ども・成人、緩和ケア、その他（二俣泉）

第28回	音楽療法の活動の体験①：歌唱、聴取（二俣泉）
第29回	音楽療法の活動の体験②：楽器演奏、即興（二俣泉）
第30回	音楽療法のまとめ、後期のまとめ（二俣泉）

履修上の注意

舞台芸術全般への興味と関心をもって授業に臨むこと。積極的なディスカッションへの参加を望む。なお、評価については、各担当教員が各最終回授業までに指示する。各担当教員が指示する課題、提出方法、期限は厳守し提出すること。
第16回～第20回は火曜5時限に開講する（その他は火曜3時限）。必要に応じて教室変更もあるため、よく確認すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

指定された教科書に目を通しておくこと（約60分）（前期）。授業の内容に関して、自主的に予習をしておくこと（約60分）（後期）。
各回の授業内容について理解を深めるよう、しっかりと復習をしておくこと（約60分）。

教科書・参考書

教科書：「クラシック・コンサート制作の基礎知識」日本クラシック音楽事業協会発行（前期授業で使用）

科目名－クラス名

芸術運営演習　D

曜日時限

火 1時限

担当教員

石田　麻子

授業形態	開講年次	開講期	単位数
演習	3～	通年	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	50	0	50	0	100

教育到達目標と概要

翌年度の卒業研究・論文執筆に向けて、研究のテーマ・手法について知識と理解を深めることを目標とする。
ディスカッション等により論理的思考とプレゼンテーションの能力を養い、他の履修者と研究上の関心を共有する。
クラス毎に履修者の報告をもとにディスカッションをおこなうほか、他の履修者や上級生とグループ研究やフィールドワークなどをおこなうことがある。
履修者は年度末にまとめレポート（4,000字程度）を作成し提出するほか、報告会で各クラスの活動の概要と成果を報告する。これらにより成績評価をおこなう。

学修成果

・研究のテーマ・手法についての知識・理解を深め、論理的思考ができるようになる。
・効果的なプレゼンテーションと的確な文章表現ができるようになる。
・他者と協働し、スムーズなコミュニケーションができるようになる。

授業展開と内容

第1回　ガイダンス（全体）
第2回　関心ある研究課題について報告し、ディスカッションする
第3回　他の履修者の関心ある研究課題についての報告を聞き、ディスカッションする
第4回　関心ある研究課題について情報収集し、それにもとづきディスカッションする
第5回　他の履修者が収集した情報に関する報告を聞き、ディスカッションする
第6回　関心ある研究課題の周辺領域について情報収集し、それにもとづきディスカッションする
第7回　他の履修者が収集した周辺領域についての情報に関する報告を聞き、ディスカッションする
第8回　研究課題を絞り込み、それにもとづきディスカッションする
第9回　他の履修者が絞り込んだ研究課題についての報告を聞き、ディスカッションする
第10回　研究手法について報告し、ディスカッションする
第11回　他の履修者の研究手法についての報告を聞き、ディスカッションする
第12回　絞りこんだ課題・手法により文献調査を実施し、成果を報告、ディスカッションする
第13回　他の履修者の文献調査の成果の報告を聞き、ディスカッションする
第14回　研究課題・手法の見直しについてディスカッションする
第15回　前期の研究成果を報告し、夏休み中の研究計画についてディスカッションする

第16回　夏休み中の研究成果を報告し、ディスカッションする
第17回　他の履修者の夏休み中の研究成果の報告を聞き、ディスカッションする
第18回　後期の研究計画についてディスカッションする
第19回　研究計画に沿って、研究・フィールドワークを実施し、成果を報告、ディスカッションする
第20回　他の履修者の研究・フィールドワークの成果の報告を聞き、ディスカッションする
第21回　ここまでの研究成果をまとめて報告し、ディスカッションする
第22回　研究計画の見直しについて報告し、ディスカッションする
第23回　見直した研究計画に沿って、研究・フィールドワークを実施し、成果を報告、ディスカッションする
第24回　他の履修者の研究・フィールドワークの成果の報告を聞き、ディスカッションする
第25回　一年間の研究成果を報告し、ディスカッションする
第26回　他の履修者の一年間の研究成果の報告を聞き、ディスカッションする
第27回　レポートのテーマ、章立てについて報告し、ディスカッションする
第28回　レポートの内容について報告し、ディスカッションする
第29回　報告会に向けて準備する
第30回　報告会にて一年間の研究成果を報告する（詳細は別途指示する）

履修上の注意

・翌年度の卒業研究の基礎を固める科目であるので、履修者は主体的に取り組むこと。
・授業時間外での学修に十分な時間をかけること。
・担当教員と密に連絡をとり、参考書や調査対象等についてアドヴァイスを受けること。
・提出物等に関する通知・連絡に注意すること（締め切りを過ぎた提出物は受け付けない）。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

・授業では、履修者による報告をもとにディスカッション（フィードバック）するので、授業時間外に各自の関心に応じて情報収集・整理などを進めて、報告の準備をすること（各回60分以上）。

教科書・参考書

参考書：外山滋比古『思考の整理学』（ちくま文庫、1986年）。酒井聡樹『これからレポート・卒論を書く若者のために』（共立出版、2007年）。小笠原喜康『新版 大学生のためのレポート・論文術』（講談社現代新書、2009年）。その他、各自の研究テーマに応じて指示する。

科目名－クラス名

文化政策研究Ⅱ

曜日時限

水 2時限

担当教員

石田　麻子

授業形態	開講年次	開講期	単位数
講義	1～	前期	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	30	0	70	0	100

教育到達目標と概要

諸外国の文化政策に係る基礎知識が修得済みであることを前提に授業を進める。授業を通じ、特定の事例をとりあげ関連する文化政策を分析する手法を獲得することを目標とする。文化政策の中でもとりわけ複雑な芸術的要素を包含する舞台芸術に係る政策は、諸外国においても、社会情勢、経済状況などとも密接な関係がある。そのため、劇場や音楽祭の運営など具体的な事例を取り上げながら、それらを取り巻く各国の文化政策事情を分析的に学んでいく。

学修成果

前半は教員の、後半は受講学生課題提示をきっかけとしたディスカッション形式とするため、文化政策に関連する深い専門知識を修得したうえで、自らの研究に活用するための文化政策に関する理論を身につけ、論理的思考力や課題解決力を涵養することができる。特に、各国の舞台芸術政策において核となる主要都市の劇場と、それに関連する国およびその他のセクターによる政策や実際の事業について具体的に論じられるようになる。さらに、特色づくりに成功している音楽祭に関連した政策に関する専門知識を得られる。

授業展開と内容

第1回	ガイダンス、海外の舞台芸術政策特論（1）授業の進行確認、課題選択の方法、さらにケース・スタディの手法を提示する。
第2回	海外の舞台芸術政策特論（2）劇場とそれを取り巻く政策について取り上げる。ヨーロッパ編①　各国のアーツ・カウンシルの状況把握
第3回	海外の舞台芸術政策特論（3）劇場とそれを取り巻く政策について取り上げる。ヨーロッパ編②　アーツ・カウンシルの組織構造分析
第4回	海外の舞台芸術政策特論（4）劇場とそれを取り巻く政策について取り上げる。ヨーロッパ編③　アーツ・カウンシルの課題と展望
第5回	海外の舞台芸術政策特論（5）劇場とそれを取り巻く政策について取り上げる。中国編　中国の劇場経営と文化政策の現状
第6回	海外の舞台芸術政策特論（6）劇場とそれを取り巻く政策について取り上げる。韓国編　韓国の芸術組織と文化政策の現状
第7回	海外の舞台芸術政策特論（7）音楽祭とそれを取り巻く政策について取り上げる。ヨーロッパ編①　経済効果の推移
第8回	海外の舞台芸術政策特論（8）音楽祭とそれを取り巻く政策について取り上げる。ヨーロッパ編③　地域における音楽祭の意義
第9回	海外の舞台芸術政策ケース・スタディ（1）学生の課題提起による考察。舞台芸術政策と他領域の政策との融合を視点とする。
第10回	海外の舞台芸術政策ケース・スタディ（2）学生の課題提起による考察。国別の特徴を明確に把握する。
第11回	海外の舞台芸術政策ケース・スタディ（3）学生の課題提起による考察。舞台芸術関連組織の運営からみた検討を行う。
第12回	海外の舞台芸術政策ケース・スタディ（4）学生の課題提起による考察。アーツカウンシル制度など助成の制度運用からみた検討とする。
第13回	海外の舞台芸術政策ケース・スタディ（5）学生の課題提起による考察。舞台芸術政策における経済効果の検討を行う。
第14回	日本の舞台芸術政策と海外の舞台芸術政策の比較　　我が国への適用可能性を検討する。
第15回	総　括　　世界の舞台芸術政策の傾向を整理し、今後の方向を考察する。
第16回	
第17回	
第18回	
第19回	
第20回	
第21回	
第22回	
第23回	
第24回	
第25回	
第26回	
第27回	
第28回	
第29回	
第30回	

履修上の注意

舞台芸術政策を学ぶ意義を明確に認識したうえで履修すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

世界の政治、経済、社会情勢などの情報収集に努め、授業での発表と議論に備えること。予習や復習にぞれぞれ60分程度必要となる。特に、授業内での成果発表に向けた資料や文献調査などには予習は普段の２～3倍程度の時間を要する。

教科書・参考書

教科書：石田麻子『芸術文化助成の考え方』（美学出版）を購入のうえ、事前に読み進めておくこと。
参考書：必要に応じて、授業で随時指示する。

科目名－クラス名

音楽マネジメント特殊講義Ⅴ

曜日時限

他

担当教員

石田　麻子

授業形態	開講年次	開講期	単位数
講義	1～	前期	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	50	0	0	50	100

教育到達目標と概要

我が国を代表するオペラ劇場である新国立劇場のマネジメントをテーマとして、オペラ制作、舞踊制作、演劇制作等およびそれに関連する実務に関する知識を得る。舞台技術等の見学研修を通じ、現在の舞台芸術創造の最前線の状況を総合的に修得することを目標とする。新国立劇場で実際制作実務に携わっていらっしゃる担当者の方々を外部講師としてお招きする。

学修成果

総合舞台芸術であるオペラをはじめ、舞踊、演劇創造の実際について、最新の知識を得られる。実際に携わられているご担当者の方々による講義の機会は、最高の学びの場の提供となる。この授業により、国の文化政策、国立の現代舞台芸術創造の有り方、施設運営等を含めた総合的な舞台芸術制作のあり方を修得できる。

授業展開と内容

第1回	新国立劇場のオペラ制作の実務について講義を通じて学ぶ。
第2回	新国立劇場の舞踊制作の実務について講義を通じて学ぶ。
第3回	新国立劇場の営業について講義を通じて学ぶ。
第4回	新国立劇場の営業実務について講義を通じて学ぶ。
第5回	新国立劇場の舞台技術に関する概説。
第6回	新国立劇場の舞台技術に関して、実際の見学を交えて学ぶ。
第7回	新国立劇場の舞台技術に関して、概説と見学を踏まえて総括する。
第8回	新国立劇場と地域連携、海外との連携、および大学連携の現状について学ぶ。
第9回	新国立劇場の人材育成手法について学ぶ。
第10回	国の文化政策と新国立劇場
第11回	新国立劇場のオペラ制作に関する基本的な考え方を、オペラ制作の体制分析を通じて学ぶ。
第12回	新国立劇場のオペラ制作に関して基本的な考え方を、レパートリーの分析を通じて学ぶ。
第13回	新国立劇場のオペラ制作に関する基本的な考え方を、総合的に把握する。
第14回	新国立劇場の法的実務について学ぶ。
第15回	新国立劇場の演劇制作の実務について講義を通じて学ぶ。
第16回	
第17回	
第18回	
第19回	
第20回	
第21回	
第22回	
第23回	
第24回	
第25回	
第26回	
第27回	
第28回	
第29回	
第30回	

履修上の注意

集中講義期間中、新国立劇場と学内教室で実施する。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

新国立劇場で行われる舞台上演に関する情報をあらかじめ得ておくこと。実際の舞台上演に接しておくことが望ましい。

教科書・参考書

授業で指示する。

科目名－クラス名

音楽マネジメント特殊講義Ⅵ

曜日時限

集中

担当教員

石田　麻子

授業形態	開講年次	開講期	単位数
講義	1～	後期	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	50	0	0	50	100

教育到達目標と概要

神奈川県が設置する神奈川県民ホール、神奈川芸術劇場、神奈川県立音楽堂は、我が国の舞台芸術上演会場として、重要な役割を担っている。これらを管理運営する（公財）神奈川芸術文化財団との協力により、その現状について詳細に把握することを目標とする。授業は、神奈川県民ホール、神奈川芸術劇場等に履修者が出向き、実際に業務に携わる方々による集中講義を受講するものとする。一部、本学内教室での講義も実施する。

学修成果

神奈川県の文化政策における劇場、音楽堂等の位置づけ、各館の運営・制作・技術運営等の様々な業務の実際を知り、専門知識を獲得することで、自身の研究に役立てることができる。各業務に携わる方々から受ける直接の講義、さらに見学研修は実態に基づいた活きた学修とすることができる。

授業展開と内容

第1回	神奈川県の文化政策と劇場、音楽堂等との関連①～県の文化政策における劇場、音楽堂等の位置づけを考察する。
第2回	神奈川県の文化政策と劇場、音楽堂等との関連②～県内の芸術団体、芸術大学等との連携を展望する。
第3回	（公財）神奈川芸術文化財団の概要①～公益財団法人とは、財団が指定管理を受託する館について知る。
第4回	（公財）神奈川芸術文化財団の概要②～各館の特色、各館で働く人材の概要を知る。
第5回	（公財）神奈川芸術文化財団の概要③～各館の特色、各館で働く人材について詳細を掴む。
第6回	神奈川芸術劇場について①～演劇制作について講義を受ける。
第7回	神奈川芸術劇場について②～館の設備と技術運営の見学研修
第8回	神奈川芸術劇場について③～技術運営の見学研修
第9回	神奈川県民ホールについて①～設置の経緯とこれまでの活動、運営について知る。
第10回	神奈川県民ホールについて②～オペラ等の制作について把握する。
第11回	神奈川県民ホールについて③～劇場外組織との連携状況について知る。
第12回	神奈川県立音楽堂について①～設置の経緯とこれまでの活動、運営について知る。
第13回	神奈川県立音楽堂について②～館の活動の特色とまとめ
第14回	劇場、音楽堂等を取り巻く環境①～法制度と劇場、音楽堂等の運営の実際について知る。
第15回	劇場、音楽堂等を取り巻く環境②～劇場間の共同制作のありかた、助成制度、国際交流の場としての劇場、まとめ
第16回	
第17回	
第18回	
第19回	
第20回	
第21回	
第22回	
第23回	
第24回	
第25回	
第26回	
第27回	
第28回	
第29回	
第30回	

履修上の注意

授業は、学外講師による講義および現地での見学研修からなり、各研修先および学内教室で実施する。講師の方々の業務の状況や各館の事業実施状況により、各回のタイミング等は前後することがあることを承知しておくこと。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

神奈川県の劇場、音楽堂等の設置状況について、予習・復習の時間を十分に確保して、あらかじめ知識を得ることと、授業を通じて獲得した知見を復習しておくこと。各回それぞれ60分以上の時間を要する。

教科書・参考書

授業で指示する。

科目名－クラス名

音楽芸術運営特別演習①

曜日時限

他

担当教員

石田　麻子

授業形態	開講年次	開講期	単位数
その他	1～	通年	4

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	50	0	50	0	100

教育到達目標と概要

音楽芸術運営専攻の各コースで1年目に行われる主専攻の授業であり、核となるものである。
各自が構想する修士論文のテーマに合わせ、論文執筆に向けた実践力・研究力を高める。
2年次の修士論文執筆を念頭に置き、特定のテーマあるいは複数のテーマを取り上げ、事例検証や論旨展開の考察、発表やディスカッションによる再検討などを中心に進める。
学年末に中間報告会をおこなう。成績評価はこれによりおこなう。

学修成果

研究テーマに沿って、適切な手法を選択できる。
研究に必要な基礎資料を調査・収集し、データを適切に抽出することができる。
データを分析し、それをもとにした考察、及びディスカッションができる。その成果を発表できる。

授業展開と内容

第1回　1. ガイダンス
第2回　2. 研究テーマの設定（1）：現状と課題を検討しながら研究テーマを構想する
第3回　3. 研究テーマの設定（2）：研究テーマを仮に設定する
第4回　4. 調査研究の手法（1）：研究テーマに基づき調査研究の手法を整理する
第5回　5. 調査研究の手法（2）：研究テーマに基づき調査研究の手法を検討する
第6回　6. 調査研究の手法（3）：調査研究の手法を仮に決定する
第7回　7. 基礎資料の調査と収集（1）：文献検索をおこなう
第8回　8. 基礎資料の調査と収集（2）：文献収集をおこなう
第9回　9. 基礎資料の調査と収集（3）：収集した文献を整理・分析する
第10回　10. 調査に基づいた発表とディスカッション（1）：整理した資料をもとに発表し、議論する
第11回　11. 調査に基づいた発表とディスカッション（2）：議論の中から資料の再整理と位置付けを図る
第12回　12. 論理展開の手法（1）：論文の目的を検討する
第13回　13. 論理展開の手法（2）：論文の柱立てを検討する
第14回　14. 論理展開の手法（3）：論文の論旨展開を検討する
第15回　15. まとめ：前期のまとめをおこなう

第16回　1. 前期授業の再確認と後期内容のガイダンス
第17回　2. 事例検証の対象と手法（1）：事例検証の対象を検討する
第18回　3. 事例検証の対象と手法（2）：事例検証の手法を確認する
第19回　4. 事例検証（1）：事例について調査する
第20回　5. 事例検証（2）：事例についての調査結果を整理する
第21回　6. 事例検証（3）：事例について調査結果を分析する
第22回　7. 事例検証（4）：事例について調査・分析結果を検証する
第23回　8. 事例検証に基づく発表とディスカッション（1）：事例検証の結果を報告する
第24回　9. 事例検証に基づく発表とディスカッション（2）：事例検証の結果について議論する
第25回　10. 事例検証に基づく発表とディスカッション（3）：議論の中から事例検証の位置付けを図る
第26回　11. 事例検証に基づく発表とディスカッション（4）：議論の結果から以後の研究計画を検討する
第27回　12. 論理展開の手法（4）：これまでの研究の進捗をもとに、論文の柱立てを再検討する
第28回　13. 論理展開の手法（5）：これまでの研究の進捗をもとに、論文の論旨展開を再検討する
第29回　14. 中間発表に向けた短い論文の執筆：中間発表に向けて短い論文を執筆する

第30回 15. 授業のまとめ：1年次のまとめをおこなう

履修上の注意

研究テーマに基づき、資料の収集と整理、事例検証、論文の柱立て、論旨展開の検討、発表とディスカッションを繰り返し、論文の書き方を身に着けるために、主体的に研究をすすめること。
年度末には中間報告会に出席し、研究の進捗状況および今後の研究計画を報告すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

各自のテーマ内容に応じて、各段階で課せられた課題を着実にこなすこと（合計120時間以上）。
研究成果・進捗状況に対するフィードバックは、各回のディスカッションならびに年度末の発表会においておこなう。

教科書・参考書

必要に応じて、授業内で適宜指示する。

科目名－クラス名

音楽芸術運営特別演習①

曜日時限

他

担当教員

石田　麻子

授業形態	開講年次	開講期	単位数
その他	1～	通年	4

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	40	60	0	0	100

教育到達目標と概要

音楽芸術運営専攻の各コースで1年目に行われる、主専攻の授業であり核となるものである。
各自が設定した題材やテーマにより、修士研究を行うことを目的とする。
2年次の公演制作を念頭に置き、とりあげる題材について研究し、企画立案・制作にかかわる準備を行う。
学年末に中間報告会をおこなう。成績評価はこれによりおこなう。

学修成果

制作演習を実施するためのノウハウを修得し、次年度における公演実施に向けての準備ができる。

授業展開と内容

第1回　1. 授業ガイダンス
第2回　2. 実施計画の策定（１）公演制作に必要な事項
第3回　3. 実施計画の策定（２）公演制作に必要な人員・役割
第4回　4. 実施計画に沿った研究の実施（１）公演制作の工程・予算などの検討
第5回　5. 実施計画に沿った研究の実施（２）台本とはなにか
第6回　6. 実施計画に沿った研究の実施（３）台本制作に関する予備的な検討
第7回　7. 実施計画に沿った研究の実施（４）台本委嘱に関する予備的な検討
第8回　8. 実施計画に沿った研究の実施（５）台本作家の調査
第9回　9. 実施計画に沿った研究の実施（６）台本作家の選定
第10回　10. 実施計画に沿った研究の実施（７）台本の構想メモ作成
第11回　11. 実施計画に沿った研究の実施（８）台本の構想メモ整理
第12回　12. 実施計画に沿った研究の実施（９）台本の大枠の検討
第13回　13. 実施計画に沿った研究の実施（１０）台本の作成（前半）
第14回　14. 実施計画に沿った研究の実施（１１）台本の作成（後半）
第15回　15. 前期のまとめ

第16回　1. 前期の評価・反省
第17回　2. 実施計画の進行確認
第18回　3. 実施計画に沿った研究の実施（１）台本と音楽の関係
第19回　4. 授業計画に沿った研究の実施（２）音楽のジャンルの整理
第20回　5. 授業計画に沿った研究の実施（３）音楽のジャンルの検討
第21回　6. 授業計画に沿った研究の実施（４）楽器編成と声の考察
第22回　7. 授業計画に沿った研究の実施（５）音楽制作に関する予備的な検討
第23回　8. 授業計画に沿った研究の実施（６）作曲委嘱に関する予備的な検討
第24回　9. 授業計画に沿った研究の実施（７）作曲家の調査
第25回　10. 授業計画に沿った研究の実施（８）作曲家の選定
第26回　11. 授業計画に沿った研究の実施（９）作品の構想メモ作成
第27回　12. 授業計画に沿った研究の実施（１０）作品の構想メモ整理
第28回　13. 授業計画に沿った研究の実施（１１）作品制作（前半）
第29回　14. 授業計画に沿った研究の実施（１２）作品制作（後半）
第30回　15. 研究の総括

履修上の注意

新たな作品を創作する制作過程を実地に学ぶ授業である。十分な意欲を持って主体的に研究をすすめる、授業に参加すること。
年度末には中間報告会に出席し、研究の進捗状況および今後の研究計画を報告すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

授業外での制作に関わる多様な作業が必要になる（合計120時間以上）。様々な人のアドヴァイスを積極的に受けて公演制作に生かすこと。
研究成果・進捗状況に対するフィードバックは、各回のディスカッションならびに年度末の発表会においておこなう。

教科書・参考書

必要に応じてその都度、指示を与える。

科目名－クラス名

音楽芸術運営特別演習②

曜日時限

他

担当教員

石田　麻子

授業形態	開講年次	開講期	単位数
その他	2～	通年	4

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	0	0	100	0	100

教育到達目標と概要

音楽芸術運営専攻各コースで2年目に行われる主専攻の授業であり、核となるものである。
音楽芸術運営特別演習①で立案した公演を実施する。

学修成果

企画・立案した公演を実践することで、音楽芸術公演のプロデューサーの実際の作業を学び、公演制作のよりよい手法を検討することができる。

授業展開と内容

第1回　1. 公演実施に向けて～ガイダンス
第2回　2. 公演プランニング①　キャスティング
第3回　3. 公演プランニング②　脚本
第4回　4. 公演プランニング③　演出・照明・音響
第5回　5. 公演プランニング④　衣装・ヘアメイク
第6回　6. 公演実施計画①　予算案策定
第7回　7. 公演実施計画②　小屋打ち合わせ
第8回　8. 公演実施計画③　チケット販売マーケティング
第9回　9. 公演実施計画④　プロモーション
第10回　10. 公演実施計画⑤　広報と販売促進
第11回　11. 公演準備リハーサル第1回　全体的な反省
第12回　12. 公演準備リハーサル第2回　公演制作・準備に関する事項を中心とした反省
第13回　13. 公演準備リハーサル第3回　前半部分を中心とした反省
第14回　14. 公演準備リハーサル第4回　後半部分を中心とした反省
第15回　15. 公演準備リハーサル第5回　今後の準備作業の計画

第16回　1. 公演に向けての最終確認①　実施要綱
第17回　2. 公演に向けての最終確認②　予算
第18回　3. 公演に向けての最終確認③　キャスティング
第19回　4. 公演に向けての最終確認④　演出
第20回　5. 公演に向けての最終確認⑤　照明
第21回　6. 公演に向けての最終確認⑥　音響
第22回　7. 公演に向けての最終確認⑦　衣装・ヘアメイク
第23回　8. 公演に向けての最終確認⑧　本番当日の役割
第24回　9. 公演に向けての最終確認⑨　本番当日の人員配置・手配
第25回　10. 公演に向けての最終確認⑩　リハーサル、ゲネプロ、本番のスケジュール
第26回　11. リハーサル
第27回　12. ゲネプロ
第28回　13. 本番
第29回　14. 会計収支
第30回　15. 成果のまとめ

履修上の注意

学修の成果により評価する。
本番までのプロセスのすべてが重要な学修となる。

公演実現に向けて自ら率先して、全方位に向けて活動すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

他の舞台芸術公演をできるだけ多く鑑賞し、流行や新しい手法等について把握するよう努め、それらを制作に活かすこと（合計120時間以上）。
研究成果・進捗状況に対するフィードバックは、各回のディスカッションならびに公演後の総括の際などにおいておこなう。

教科書・参考書

必要に応じてその都度、指示を与える。

科目名－クラス名

音楽芸術運営特別演習②

曜日時限

他

担当教員

石田　麻子

授業形態	開講年次	開講期	単位数
その他	2～	通年	4

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	50	0	50	0	100

教育到達目標と概要

音楽芸術運営専攻各コースで2年目に行われる主専攻の授業であり、核となるものである。
各自が設定した研究テーマに即し、事例検証、論文の構成、論旨展開について一層の考察を進めるとともに、発表やディスカッションによりこれを再検討ないし深化させつつ論文執筆に反映し、最終的に論文を完成させる。

学修成果

研究テーマに沿って、適切な手法により、研究を進めることができる。
正しい論理展開をできる。
論文にまとめて発表できる。

授業展開と内容

第1回　1. ガイダンス

第2回　2. 研究テーマ設定（1）：研究テーマを再確認し、さらに掘り下げる

第3回　3. 研究テーマ設定（2）：研究テーマと研究計画を策定する

第4回　4. 修士論文の構成（1）：修士論文の構成について再検討する

第5回　5. 修士論文の構成（2）：修士論文の構成について概略を確定する

第6回　6. 事例検証の対象と手法を再確認する

第7回　7. 事例検証（1）：事例について調査する

第8回　8. 事例検証（2）：事例について整理する

第9回　9. 事例検証（3）：事例について分析する

第10回　10. 事例検証（4）：事例について検証する

第11回　11. 論旨展開の手法（1）：これまでの調査結果を整理する

第12回　12. 論旨展開の手法（2）：論文の構成と論旨展開を検討する

第13回　13. 中間発表準備（1）：中間発表の構成を検討する

第14回　14. 中間発表準備（2）：中間発表の原稿・スライドを作成する

第15回　15. 中間発表準備（3）：中間発表の予行をおこなう

第16回　1. 前期授業の再確認と後記内容のガイダンス

第17回　2. 先行研究の再検証（1）：先行研究を調査する

第18回　3. 先行研究の再検証（2）：先行研究を分析する

第19回　4. 先行研究の再検証（3）：先行研究を整理する

第20回　5. 先行研究の再検証（4）：先行研究の検討結果を執筆する

第21回　6. 論旨展開の再検討（1）：これまでの研究の成果を確認する

第22回　7. 論旨展開の再検討（2）：論旨展開をさらに検討する

第23回　8. 論旨展開の再検討（3）：論旨展開を確定する

第24回　9. 修士論文執筆（1）：本論前半を中心に執筆・推敲する

第25回　10. 修士論文執筆（2）：本論後半を中心に執筆・推敲する

第26回　11. 修士論文執筆（3）：結論を中心に執筆・推敲する

第27回　12. 修士論文執筆（4）：序論を中心に執筆・推敲する

第28回　13. 修士論文執筆（5）：参考文献、注、資料編等を作成する

第29回　14. 修士論文執筆（6）：全体を推敲して完成させる

第30回　15. 口頭試問に向けて：発表の予行をおこなう

履修上の注意

学修の成果により評価する。
研究テーマに基づき、事例検証、論文構成、論旨展開の検討、発表とディスカッションによる再検討を繰り返しながら、修士論文の執筆を進めること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

（新）各自のテーマ内容に応じて、各段階で課せられた課題を着実にこなし、論文執筆を進めること（合計120時間以上）。
研究成果・進捗状況に対するフィードバックは、各回のディスカッションならびに学位審査の際などにおいておこなう。

教科書・参考書

必要に応じて、授業内で適宜指示する。

科目名－クラス名

博士研究指導

曜日時限

他

担当教員

石田　麻子

授業形態	開講年次	開講期	単位数
その他	1～	通年	0

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	100	0	0	0	100

教育到達目標と概要

博士課程における研究を総括するとともに、その根幹をなす科目であり、第1年次～第3年次を通じて設置される専門科目である。3年間を通じての全体的な研究計画、および年次ごとの研究計画を策定し、その研究成果の検証と評価を行う。原則として、舞台芸術政策研究、舞台芸術マネジメント研究、または音楽療法研究のうち、いずれかの専門分野の研究指導教員が指導する。第1年次には年度末に「研究進捗状況報告書」を提出し「博士年次研究発表」を行う。第2年次には翌年博士論文を提出する者は学位予備審査を受ける。第3年次（最終年次）には、3

学修成果

明確な問題意識を持って研究対象を定め、その対象の特質や問題の設定に応じた正しい方法論を選択し、それに従って計画的に研究を遂行する一連のプロセス（研究におけるPlan-Do-Check-Actのプロセス）を修得し、自立した研究者となるための素養を身に付けることができる。

授業展開と内容

第1回　①第1年次＜4月＞学生は、3年間を通じて取り組む研究課題とその実施計画、および当年度の具体的な研究計画書と博士論文の執筆計画書を提出する。これに基づき、担当する研究指導教員と面談を行い、その内容や方法論に関して指導とオーソライズ（承認）を受ける。＜2～3月＞学生は当年度の研究成果および博士論文執筆の進捗状況を文書により報告する。これに基づき、担当する研究指導教員と面談を行い、「博士特別運営研究」における年次研究発表の評価とあわせて、全体的な年次研究成果の評価を受ける。

第2回　②第2年次＜4月＞学生は、当年度の具体的な研究計画書、および博士論文の執筆計画書を提出する。これに基づき、担当する研究指導教員と面談を行い、その内容や方法論に関して指導とオーソライズ（承認）を受ける。＜2～3月＞学生は当年度の研究成果および博士論文執筆の進捗状況を文書により報告する。これに基づき、担当する研究指導教員と面談を行い、「博士特別運営研究」における年次研究発表の評価とあわせて、全体的な年次研究成果の評価を受ける。翌年度に学位審査を受ける者は予備審査を受ける。予備審査を受ける場合は博士研究指導は不

第3回　③第3年次（最終年次）＜4月＞学生は、当年度の具体的な研究計画書、および博士論文の執筆計画書を提出する。これに基づき、担当する研究指導教員と面談を行い、その内容や方法論に関して指導とオーソライズ（承認）を受ける。＜9月以降＞学生は、3年間の研究成果を総括するものとして博士論文の提出を行う。博士論文は、昭和音楽大学大学院規則ならびに昭和音楽大学学位規則に則って行われる学位審査にかけられる。

第4回

第5回

第6回

第7回

第8回

第9回

第10回

第11回

第12回

第13回

第14回

第15回

第16回

第17回

第18回

第19回

第20回

第21回

第22回

第23回

第24回

第25回

第26回

第27回

第28回

第29回

第30回

履修上の注意

年次ごとの研究計画に沿って、各自系統的かつ計画的に研究を進める。「研究進捗状況報告書」の提出期限、および「博士年次研究発表」の実施日は別途発表する。上記の授業回数は便宜上第１回に第１年次、第２回に第2年次、第3回に第3年次の内容を記載している。そのため実際の授業回数（研究指導回数）を意味するものではない点に注意すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

年次ごとの研究計画に沿って、各自系統的かつ計画的に研究を進めること。

教科書・参考書

なし

科目名－クラス名

博士特別運営研究②

曜日時限

他

担当教員

石田　麻子

授業形態	開講年次	開講期	単位数
演習	2～	通年	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	70	0	30	0	100

教育到達目標と概要

学生は各自の研究主題に関連する研究を進める。先行研究等の中で革新的で新規性をもった研究内容の獲得を目標とする。ゼミナール形式での授業形態をとる。

学修成果

正確なデータの収集と分析、多様な資料の読み解きを通じて、専門分野に関する幅広い知識と独自性を伴った視点を養い、それを言語化できるようになる。そのために必要となる多角的な視点を獲得したうえで、十分なディスカッションを行えるようになる。一定のテーマに関する思考力を涵養し、プレゼンテーション能力を身につけられる。

授業展開と内容

第1回	授業内容は別紙記載のとおり
第2回	
第3回	
第4回	
第5回	
第6回	
第7回	
第8回	
第9回	
第10回	
第11回	
第12回	
第13回	
第14回	
第15回	
第16回	
第17回	
第18回	
第19回	
第20回	
第21回	
第22回	
第23回	
第24回	
第25回	
第26回	
第27回	
第28回	
第29回	
第30回	

履修上の注意

研究者としての姿勢を涵養するためのゼミナールである。自らの研究課題を積極的に提示、解決にむけてディスカッションを進めるなど、積極的な研究態度で履修すること。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

先行研究の把握に努めること。授業の予習・復習に必要となる時間をあてて、プレゼンテーションの技術を高めること。

教科書・参考書

教科書：石田麻子『芸術文化助成の考え方』（美学出版）を購入のうえ、事前に読み進めておくこと。
参考書：授業で検討、適宜指示をする。

科目名－クラス名

博士論文演習②

曜日時限

他

担当教員

石田　麻子

授業形態	開講年次	開講期	単位数
演習	2～	通年	2

評価方法	定期試験				その他の試験	合計
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
評価割合	0	70	0	30	0	100

教育到達目標と概要

学生は「博士研究指導」においてオーソライズされた執筆計画に従って博士論文の執筆を行う。各自の研究主題に関する、客観的で体系的な先行研究の検証を実施する。論文執筆に向けた第二段階として、既に収集した多様な資料やデータに関する考察を進め、自らの課題設定を一層明確にする。そのうえで、一年次に執筆した論文のテーマを踏まえて、さらに異なる小論文の執筆を行い、学会発表や大学の紀要等に投稿できるようにすることを本授業の目標とする。予備審査の準備にもつなげられる。

学修成果

正確なデータの収集と分析、多様な資料の読み解きを通じて、専門分野に関する幅広い知識と独自性を伴った視点を養い、それを言語化できるようになる。学会発表等におけるプレゼンテーション能力や論文執筆能力を身につけられる。

授業展開と内容

第1回　全30回の授業の進め方は別紙記載のとおり

第2回

第3回

第4回

第5回

第6回

第7回

第8回

第9回

第10回

第11回

第12回

第13回

第14回

第15回

第16回

第17回

第18回

第19回

第20回

第21回

第22回

第23回

第24回

第25回

第26回

第27回

第28回

第29回

第30回

履修上の注意

自らの論文執筆状況を毎週報告できるように準備をして臨むこと。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

小論文の執筆を積み重ねること。プレゼンテーション能力の向上に努めること。（合計30時間以上）研究成果・進捗状況に対するフィードバックは、各回のディス

カッションならびに「博士研究指導」の際におこなう。

教科書・参考書

授業で検討、適宜指示をする。

2022年度(後期・通年)「学生による授業評価アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード：1404　教員名：石田　麻子

１）評価結果に対する所見

単独担当の科目「文化政策論Ⅱ」「芸術運営演習 D」では総合的満足度「そう思う」が 100%となり、満足度が極めて高かった。とくに「文化政策論Ⅱ」のコメントに「音楽は音楽単体で存在しているわけではない、と毎週考えさせていただきました」とあった。この点は、学生からの意見として、ありがたくしっかり受け止めていきたい。
毎回、芸術文化マネジメントの世界の第一線で活躍しておられるゲストを招き実施している「芸術運営論Ⅱ」は、総合的満足度「そう思う」75%「少し思う」25%と高い数値となったことで、学生のニーズとの合致がみられたと考える。
大学院の「音楽マネジメント特講Ⅵ」は神奈川芸術文化財団による寄付講座として実施しているもので、これも財団の方々のご尽力と学生の熱意により、総合的満足度「そう思う」75%「少し思う」25%と高い評価を得られた。
短大の「音楽と社会特論」は社会人学生の多い授業のため、教員のほうが学ばせてもらうことも少なくない。大事にしたい授業である。

２）要望への対応・改善方策

強い要望はとくに提示されなかった。出席状況があまりよくないという回答の学生がいる科目については、そうした傾向を逓減させる工夫を今後も一層おこなっていきたい。

３）今後の課題

予習復習について、学生の声を毎回聞く工夫（現在は毎回感想を書いてもらっている）などを徹底していきたい。

以　上